

音の心理学

～その2 合唱団なのだ！～

2010.06.20 タツノオトシゴ



人間は言葉を手に入れ、互いに呼び合い、歌う事を楽しんでいます。
今回は合唱団にまつわるよもやま話にお付き合い下さい。

音は何気なく聞いているときと、耳を敬てて聴くことの違いがあります。
五感を働かせている時は、特に聞く事だけに注意している訳ではなく、視角や触覚
嗅覚なども相互に作用して、「感じる」ことが一般的なのです。

「始めまーす！」と、副団長の掛け声で、今日も体育館でトレーニングの開始です。
団長がピアノで第一体操のメロディーを演奏し、もと日本選手権の体操選手（女性）の
演技にあわせて柔軟体操です。その後ストレッチも加え、体の筋肉をほぐしていきます。

次に、登場するのは音楽大学の教授（男性）、現役のオペラ歌手です。
夜の時間帯ですが、「おはようございます」と、張りのあるバリトンでご挨拶。（^^；
「では、いつもの練習からはじめます」と、ピアノで和音を奏でます。
最初に「マメマメマメ……」、次は「イエイエイエ……」、そして「ウオウオウオ……」
と繰り返し「ラレラレラレ……」、「巻き舌でLの音を下さい！」と何時ものパターンです。
幾つかのトレーニングが終わり、次に「ハミングでトッティ！」そして「ロングトーン！」、
「動きます」と指示を出します。
同じ音を「今度は柔らかい『ア』の音で！」次に「少し力強く！」そして「パワフルに！」
と繰り返していきます。「音の方向を、客席に向かって！！」、「もっと口を縦に開く！」
「下半身の支えが出来ていない！」、「おへその下の筋肉を意識して！」、「息を均一に！」
当初 150 人を超えていた団員も、そぎ落とされて今は 120 名前後です。

タツノオトシゴが所属する関西の合唱団、かつては朝比奈隆が指揮、大阪フィルハーモニー&合唱団として 50 年近くの歴史を持っています。その後、外山雄三や亀井比呂志に引き継がれ、演奏会場も大阪のフェスティバルホールから、ザ・シンフォニーホールへと変わって行きました。（音響的には両者とも優劣が付けがたく、とても好きなホールです）ある日、合唱団から一通の手紙が来ました。

「前回のアンケート有難うございました。次年度の曲目『オラトリオ四季』も決まり、練習日も会場も決まりましたので、一度遊びがてら覗いてみてください。（団長名）」

手帳をめくり日程を確認すると、仕事も夕方には終わり暇つぶしにはもってこいの時間帯です。練習会場も、今まで福祉関係で使ったことのある場所なので、抵抗もなく行けました。受付で名前を告げ、「練習風景を見学させて下さい。」と言ったら、団長が自ら出て

きて、「何時もアンケートを有難うございます。」と丁寧なご挨拶。

「折角だから、練習に参加しません？」と微笑みかけると、回りの女性陣も「是非どうぞ！」と取り囲む。逃げ場を失い、「は〜あ！ ハッ ハイ！」と言うのが精一杯でした。

ここでも、タツノオトシゴの性格が現れています。(^^;

引込まれるのを予測しながら、自分の意志では行動せず、あくまで受身に徹します。早速、ピアノの前に立たされて発声練習、前述の先生がキーの確認をしながら曰く、「テナーとバス、どちらが希望ですか？」、「今までのご経験は？」と聞かれたので、「バスの方が慣れていますが」と返答し、「それではあちらのグループへ」と案内されました。若い人が少なく、結構おっさんばかりのメンバーなので安心しましたが、さすがツワモノぞろいです。経歴10年は当たり前、20年以上のベテラン揃いでした。

それで、先ほどの練習に参加したという訳です。

本格的な合唱練習は数十年ぶり、それでも爽快感があり現在も継続中…

練習会場も、本格的なホールも含め毎回新たな発見があります。

パートごとの練習、合同での練習、そして本番前のゲネプロ！緊張のピークです。

今までのピアノで練習と、オーケストラとの音の違い、それを1日で切り替える醍醐味！場合によっては、練習指揮者と本番指揮者の違いに戸惑いながら、修正をしていきます。クラシック音楽の場合、原語で歌うことがほとんどですが、たまに日本語訳の場合もあります。しかし、実はそちらの方が難しい。譜割と発音が旨くあっていないケースが多く、いかに原語に近いハーモニーを作るかが課題です。でも、長い曲で、原語ですべてを暗譜するのも一苦勞です。指揮者の亀井先生曰く、『合唱は究極のコミュニケーションだ！』

この言葉を聞いたとき、タツノオトシゴは確信しました。此処にも福祉がある！！
原稿の締め切り間際の悪あがき、今回も写真抜きで、手抜き原稿を送りま〜す。

フロイデ合唱団とは

1962年にベートーヴェンの「第九交響曲」を歌うために発足した伝統ある合唱団です。

「第九」の自由 平等・連帯の精神を大切にしながら、プロのオーケストラとともに「第九」の公演を続けています。また、夏にも管弦楽と大合唱の名曲大曲の公演を行なっています。指揮は、外山雄三（NHK交響楽団正指揮者）、また、充実した音楽づくりでは定評のある亀井正比古です。コンサートはフロイデ合唱団の創立以来、長年フェスティバルホールで行ってまいりましたが、2006年の「第九」より、ザ・シンフォニーホールに活動の場を移しました。フロイデ合唱団は、団員数 約150名の音楽好きの集まりで、年2回新入団員を募集します。音楽・合唱経験の有無は問いませんが、真面目に練習に参加することが入団の条件です。フロイデ合唱団は専門家の先生方の熱心な指導のもとに毎年よりすばらしい演奏を目指して練習を重ねています。特にここ数年は、発声練習とドイツ語の発音練習に力を入れ、大阪人がいかに本物のドイツ語に近い発音で、しかも音楽的に歌うかと言う難題に取り組んでいます。団の運営は団員が知恵と力を合わせて自主的に行なっています。年齢や職業の異なる団員の集まりなので、いろいろな経験を持った人がおり、合宿の夜やレクレーションなどの機会には話がはずみます。